

川下の風景

①

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【はじめに】

映画作りに憧れていた中学生の頃からドラマを描きたいと思っていました。フィクションかどうかを問わず、恋や愛や憎しみ、喜び、怒り、様々な人の思いを描くことに憧れていました。芸術大学に進み、4年映画について学び、一度はマスコミ関係に就職したものの都落ち。高齢福祉分野を生業として10数年が経ちます。施設相談員から始まり、ケアマネージャーに至るまで、様々な家族や老い、死と出会いました。しかし、それらを単なるドラマとして描く気にはなれなかったのです。私は何を目的として描きたいのか、それが臆気であったようです。児童福祉分野、障害福祉分野など、縦割り化された福祉社会で、その分野の支援者と出会い、支援者を通じて様々な生活に触れました。そこで感じたことは、児童福祉分野で抱えている問題は、20年後、30年後の高齢福祉分野の問題に他ならない、ということです。時に問題は持ち越され、暴力を振るっていた親の介護へと変容し、子が親に辛くあたってしまったたり、社会に適応できずに長年引きこもってしまった中高年層が、今度は親の介護を担うようになったり、川上から川下へ、常にひとつの流れとして生活は存在することを目の当たりにしてきました。これは、逆を言えば、「川下の風景」は上流の生活に対して、何らかのヒントや注意を促すことにならないだろうか、と思いついたのが動機に繋がります。

川下は海に繋がる河口付近で、山を下る上流に比べると流れは穏やかで、それは高齢期の生活と同じ風景にも写ります。そして、人は必ず死を迎え、残った家族や支援者は、流れゆく水が海にかえる様子を見送ります。私は40代ですが、兼ねて思うのは、80代の介護の辛さは80代になって初めて分かる。本当の意味でクライアントの支援を理解できるのは、80代になったときだろう、と。高齢者はそこに苦しみだけでなく、強さや喜びも家族と共に育んできました。そんな「川下の風景」をドラマとして描くことで、児童福祉分野や障害福祉分野など様々な人々の生活に強さのヒントを仲介できることが、この生業のもうひとつの役割かと思っています。

【土地と共に】

私が暮らす琵琶湖南部から、遠く比良の山容が見える。冬の寒さが厳しい朝は、冠雪した山容

の雄々しさが美しく、夢や憧れから暮らしの場を転々としてきた私にはない貫禄であるように映る。土地はそこに暮らす人々の生活や文化

を語る。刹那的なものではなく、悠久の中で引き継がれてきた物語。時に人を縛り、時にそれは暮らしの豊かさ、強さに映る風景を私は眺めている。

「赤いなあ」と今年 100 歳になる夫が呟いた。それが隣に座る 98 歳の妻に聞こえたかどうか分からない。年相応、長寿の夫婦は耳も遠い。「ああ、赤いなあ」

耳は遠くても、長年連れ添った夫が何か発する気配を感じるのか、共に炬燵でうつらうつらとしていた妻が、ふと窓の外に目をやってそう呟いた。ふたりはそう言ったきりで、会話は続かない。共に炬燵に座り、窓から見える風景を見ている。垣根越しに公園の木々が見える。秋も深まり、木々が色づいている。その向こうは田園風景が広がり、遠くに比良の山容が見える。空は鈍色で重々しく、雨こそは降らないが、琵琶湖の上を風が通り過ぎてくる。風を遮るものがなく、湖岸沿いに位置する集落はいつもこの風と移り気の早い天気にも晒される。

風除けという意味があるのだろうか、山間部の集落よりも、湖岸沿いの集落は家々の間が狭い。密集している感じを受ける。ずっと上空から見れば、湖岸沿いの田園風景の中に集落の島々が点在している感覚である。琵琶湖に流れる多数の河川は、水量も豊富で、農業にはうってつけの環境だ。先祖代々この地を開拓し、川や田畑を守りぬいてきた原風景が、この築 100 年以上と言われる民家の窓からもうかがいられる。

後日、家族から笑い話として聞いた。

「おじいさんは、公園の紅葉を見て、赤いなあ

と呟いた。その時、見回りの消防車が通り過ぎて、おばあさんはそれを見て、赤いなあと言っていた」

そうやって家族の解説が入っても、当の本人たちは何のことか分からない。夫は何十年と変わらない定位置の座椅子に座り、炬燵に入りながら新聞を読む日課を続ける。妻もその隣に座り、テレビを眺めながら寄り添っている。昔は賑やかだった家も、今は夫婦二人暮らし。食事の支度は家族がしてくれるが、夜は二人で床を並べて眠る。年相応、足腰も不自由になって互いに手助けが必要なことも増えてきたが、勝気な妻に急かされて、夜中に夫が妻の排泄介助をすることもあったらしい。

かつて土間だったという台所には、家族の写真が多く飾られている。孫世代ができてからの写真が多く、三世代の家族写真は孫たちの巣立ちをきっかけに更新が止まっている。土間がある民家では、大抵釜戸があり、天井は高く、長年煙で燻された風情を残す。生活様式の変化と共に、土間を板の間に改築すると同時に、天井も作りつけてしまい、昔の面影は見えない。そこに夫婦の為に手すりを付けたり、段差解消の工事を施すと、人の変化と共に暮らしの変化は家の佇まいも変えていく。よく人が暮らさなくなった家は朽ちるのが早い、と言うが、家と人の暮らしは一体的なものだと実感する。

100 歳の夫は婿養子で家長となった。先祖代々の土地、家、田畑を守ってくれよ、という期待の元に、今も本人はその使命感を忘れてはいない。

「お婆さんと一緒にデイサービスに行ったら？と言うけど、お爺さんは絶対に行くとは言わない。留守は自分が守るもんやと思ってる」

100歳の高齢者が留守番をしてるなんて、と家族も呆れ顔だ。

妻もそんな愚直な夫に感謝し、家長である夫を如何に敬うべき存在であるかを、常々、子どもたちに言って聞かせてきた。そんな子どもたちも、高度経済成長期の波に乗って、この土地を離れて、便利な土地に移り住んだ。時代の流れ、仕方がない、こんな田舎では暮らしにくい、孫たちも可哀そうだから…かつては公園で遊ぶ子どもたちの姿は珍しくもなかったが、今は集落自体がひっそりとしている。

「あそこにお地蔵さんがあるやろ。あれはな」

「あの公園の桜は、昔、〇〇さんのお爺さんが植えたもんで」

「裏の〇〇さんのお婆さんは、うちの遠縁にあたってな」

炬燵に足を突っ込みながら聞く物語は、先祖代々とは一言で言えないものだ。土地の歴史や文化に触れると、老夫婦の価値観や生き方を学ぶ。子どもたちも無理に同居しようとは言わない。心配しながらも、高齢の親の生き方を見守っている。私も無理にデイサービスに行きましよう、とは言わない。不便ながらも紡いでいる

生活がそこにある。生活に対する姿勢は変わらない。それは山々の貫禄と同じものを感じる。この土地と共に生きる、という覚悟だ。

2021.1.10 米津達也

